



現代妖怪



川崎ゆきお

「どうですか最近、妖怪は」

妖怪博士付きの編集者が様子伺いに来ている。

「相変わらずだ」

「あまり、進展はないと」

妖怪博士は妖怪を研究しているのだが、その進展はないようだ。

「古い妖怪に関しては、先人が既に解説しておる。また、妖怪図鑑もあり、そこに一つや二つ足した程度では何ともならん」

「博士は現代妖怪に強いはずなんですが、そちらの方は如何でしょうか」

「如何か」

「はい」

「古を知ることで新しきを知るといふのがある。ただ、妖怪に関してのことは、半ば冗談の場合が多い」

「はい」

「何がハイじゃ」

「相槌です」

「そんな鳴り物を打ってもらっても、続きはない」

「ああ」

「相槌と言っても、それは言葉であろう」

「はあ」

「いや、だから、槌じゃ。原型があったのだろうが、今では、顔いたりするとき、相槌を入れる。そういう道具を使うわけではないがな」

「槌って、何でしょう」

「杭を打ち込むときの木槌や鍛冶屋で使うあれだろう。交互に打つ。これは合いの手を入れるとに通じるのじゃろうなあ。語原を調べたわけではないから、分からんが。しかし、木槌の妖怪はおる。これは道具が化けたものでな。妖怪と言うより、物の怪かな」

「ありますねえ。道具が化ける例は」

「実際にはないじゃろ」

「それを言っちゃ、身も蓋もないです。博士」

「その身も蓋もの蓋は、昔の蓋だろうなあ」

「なるほど、結構ビジュアル性が高かったんですねえ。僕は箱の蓋を思い浮かべましたが、その言葉、使っているときは、そんな映像はありませんでした。ところで蓋は分かりますが、身って何でしょう」

「君はそれでも編集者か。校正は大丈夫なのか。身とは中身のことじゃ。まあ、言葉のそうした、綾や語呂から、出てきた妖怪もおる」

「身が出るって、怖そうです。具が出てしまうような」

「古の物と、今の物とは言い方が違うが、用途は同じものが多い。だから、同じように妖怪化しておるかもしれんぞ」

「それが、現代妖怪ですね」

「古にあったパターンと同じパターンで妖怪が出ておるやもしれん」

「はい」

「しかし、それを妖怪だとは呼ばん」

「妖怪は出ているのに、妖怪だと気付かないのですね」

「それは、妖怪に持ち込めんようになったからじゃ。不審なことは狐狸妖怪の仕業にしていたよ
うな昔とは違う」

「難しそうな話ですねえ」

「要するに妖怪で括れなくなったので、妖怪が減ったのじゃ」

「でも、いると」

「不思議、不可解なことが起こったときはな」

「今なら、因果関係などが分かるんじゃないですか」

「因果が分かることは分かるが、分からんことは分からん」

「頭が痛くなりました」

「科学的分析というのが妖怪なのかもしれんぞ」

「たとえばデータなどがそうですねえ」

「そうそう。平均とかな」

「ありますねえ。平年並みとかも」

「それらは現実には存在したことが一度もない」

「でも、それを妖怪だと言にくいですねえ」

「そうじゃろ。実際には出ておるのじゃが、妖怪とは言わん」

「今日は難しいです」

「まあ、妖怪は精霊として楽しむことが一番かもしれんのう」

「はい」

「精霊などおらんが、おるよように感じる。これでいい」

「今日は疲れしました。また来ます」

「うむ」

了